

# パシフィック・ヒストリーに向けて

## ——アメリカにおける研究動向を中心に——

清水さゆり

### はじめに

西欧の学会を震源として近年活発に論究されてきている「アトランティック・ヒストリー」の分析枠組みと手法は、南北アメリカ、アフリカ、ヨーロッパ四大陸に展開した近世以降の歴史過程を、有機的に繋がるひとつの連鎖として再構築することを歴史家に求めてきた。そして、そこに開けた新たな分析的地平では、従来歴史研究において支配的であり続けた一国史の枠組みを越え、域際的空間に存在していた重層的な関係性や地理的遠隔地同士を繋ぐ連鎖構造を照射することが課題となった。「アトランティック・ヒストリー」が、昨今活性化してきている「グローバル（ワールド）・ヒストリー」または「トランスナショナル・ヒストリー」の駆動主体となっている所以である。

モノ、カネ、ヒト、情報などを媒体としながら環大西洋世界を形成した「連鎖」構造のなかでも、アトランティック・ヒストリアンたちの関心を最も集めてきたのは、人の地域間移動、なかんずく大西洋を横断するアフリカ人奴隷貿易である。それはアフリカ西部から西半球各地に強制移動させられた人々の存在が、アメリカ合衆国史の「原罪」的テーマである南部黒人奴隷制と密接に繋がっているだけでなく、環大西洋世界における商業的農業の出現とその拡大という近代資本主義の展開そのものに深くかかわっているからである。17世紀に西欧の歴史主体者たちが、アフリカ黒人より収奪される不自由労働力を西半球各地域において広く「安定的」に調達する構造を創り上げたことによって、南北アメリカ大陸の土地資源の「有効」活用とそこで生産された商品作物の消費が完結した広域回路として成立した。そしてそれにより蓄積された富は、西欧社会が他地域に対して「優位」を確立するという歴史発展軌跡を可能にした。アトランティック・ヒストリアンたちは、近代史のマスター・ナラティブをこう読み替えたのである。

一方、大西洋の2倍の面積を誇る太平洋においても、19世紀には域内の労働人口が大西洋のアフリカ人奴隷貿易に匹敵する規模で移動し始めていた。そしてこの大規模国際人口移動は、スペイン帝国の衰退と中南米諸国の独立、大英帝国の再編、両大洋に接する大陸国家としてのアメリカ合衆国の出現など、大西洋世界の主要構成国をめぐる歴史変動とも密接に連動していた、いわば「地続き」の歴史展開だったのである。

近年、政策討議や研究の場で「アジア太平洋地域」や「環太平洋」などの名称が盛んに使われている。しかし、その太平洋地域についての包括的歴史研究、即ち「パシフィック・ヒストリー」は、欧米の学会において「アトランティック・ヒストリー」のような関心を集めてきたとは言いがたい。「パシフィック・ヒストリー」が研究領域として未だ「離陸」段階には至っていない

証左のひとつとして、「太平洋世界」とは一体どの地理範囲をさすのかという点について、西欧の研究者の間でまだ確固とした合意が形成されていないことがあげられる<sup>1)</sup>。例えばアメリカの歴史学界においては、従来「パシフィック・ヒストリー」とは、太平洋の島嶼とオセアニアの歴史として狭く定義する傾向が強かった。それは、1966年に創刊された学術専門誌 *Journal of Pacific History* が、主としてオーストラリアとニュージーランドの研究者たちによって運営されてきていること、そして内容的には南太平洋の島嶼地域の研究に特化するものであることと決して無縁ではないであろう。その一方で、アメリカ歴史学会 (American Historical Association) の西海岸部門が刊行する *Pacific Historical Review* は、1932年の創刊から「アメリカ (合衆国) の太平洋とその先への膨張」と「フロンティア消滅後の20世紀アメリカ西部」をその主要関心領域として掲げ続けている。ゆえに、「パシフィック・ヒストリー」とはアメリカ太平洋沿岸地域 (アラスカを含む) およびアジア (特に北東アジア) 分析対象とするという漠然とした印象を抱いているアメリカ人研究者も多い。

ひとつのまとまった分析単位としての「環太平洋地域」とは何か、はたしてそのようなまとまりをもった域際地域が実体として存在してきたのかという根本的疑問は、「太平洋の世紀」(Pacific Centuries) をテーマに掲げる国際学術会議が1995年に始めてアメリカで開催されたおりにも、参加者多数から投げかけられた。この会議は、16世紀から20世紀にかけての「太平洋世界」の形成と変容を考察することを目的としてカリフォルニア州ストックトンにあるパシフィック大学で開かれたものであり、その参加者の多くは経済史家で占められていた。その冒頭で基調演説を行ったインド洋世界の研究者 K. N. チャウデური (Kirti Narayan Chaudhuri) は、大西洋や地中海に匹敵するような域内完結性を備えた「太平洋世界」の存在について極めて懐疑的な見解を示したのである。しかし会議参加者たちは、その後1996年にメルボルン、1998年に再びストックトンで共同研究発表の場を持ち、「パシフィックヒストリー」概念の精緻化を目指し続けた。そこでは、個別的テーマを扱う実証研究を蓄積していく作業を通して、「環太平洋地域」の全体像が漸次明らかになっていくことが期待されていたのである<sup>2)</sup>。

本稿はまず、3回にわたって開催された「太平洋の世紀」会議の成果として刊行された論文集<sup>3)</sup>に所収された個別研究の一部に依拠しながら、アメリカにおける「パシフィック・ヒストリー」構築にむけた理論的模索のひとつを紹介する。そのため「太平洋の世紀」会議参加者たちが討議の前提とした暫定的合意にならい、「太平洋地域」の地理範囲を「太平洋に接する諸地域と太平洋上の島嶼」と設定し、そこから多様かつ多面的な領域であると同時に、歴史発展上ひとつのまとまりを持った分析単位としての「環太平洋地域」の外郭がおぼろげながらも浮き出てくることを期待するものである。そして、ある特定の帝国や近代国民国家を語る一国史の枠組みを超えるモノ・カネ・ヒト・情報の流れとその集積に注目する。その作業を通じて、人の空間的・地理的移動がいかなる社会経済的移動に繋がったり自然環境への長期的インパクトをもたらすのか、そして広域圏内で生じたほぼ同時期にみられた国家形成・経済発展・社会変動・文化変容の諸様態の比較や相互連関性の検討など、「アトランティック・ヒストリー」がその主要テーマとして問う諸問題を環太平洋地域でも論究する上で有益と思われる分析枠組みを提示したい。そしてそのための試論として、近年アメリカの学会で蓄積が顕著である中国人のトランスナショナルな移動研究のなかの特筆すべきいくつかの論考を紹介し、そこから得られる視座の日本人

の国際移動研究への発展的適用可能性について若干の検討を行う。

## 1. 「パシフィック・ヒストリー」の時代区分と広域連鎖の出現

### 「銀の時代」

「太平洋の世紀」会議の参加者たちは、「パシフィック・ヒストリー」の時代区分を考えると、16世紀中盤から18世紀中盤にかけて主にモノとカネの流れを介して太平洋を横断する広域連鎖構造が形成され始めたことに注目し、これを「銀の時代」として括った。このシステム黎明期に、16世紀前半にアンデス山系で銀の鉱脈が発見されたのち、現在のペルーとメキシコにあたる地域で産出される銀と中国からの輸出品（絹と陶磁器、再輸出香料）が交換される海洋交易回路が太平洋に出現した。16世紀に世界人口の約4分の1を占めていた中国と、やはり銀経済を採用していた朝貢国も加えた地域交易圏における銀価格は世界の他地域にくらべて約2倍であった。そのため、19世紀に至るまでスペインのガリオン船に積まれて多量の銀が太平洋を渡り続けたのである。また、アメリカ大陸側と比べた場合約2分の1程度の産出量ではあったが、太平洋のアジア大陸側でも16～17世紀には日本産の銀がポルトガル商人の手でマカオを通して中国大陸に盛んに輸出され、太平洋を東西に横断する銀の流れの「支流」を形成していた。つまり経済圏としての太平洋世界は、その創生期から有力な地域的サブシステムを内包する複合的構造を持っていたのである<sup>4)</sup>。

この太平洋を横切る銀の交易回路の主要結節点は、アカプルコと1571年にスペインに領有されたマニラであった。この時期ヨーロッパ人は、基本的には銀の消費側と供給側の（収奪的）仲介者としてこのシステムに参加していた。大西洋銀貿易とアカプルコ-マニラ間の銀貿易をほぼ独占していたのはスペインであったが、マニラとアジア大陸間の域内交易回路は中国商人（華商）によってほぼ牛耳られており、マニラにおいてですら、スペイン人商人の数が華商を上回ることはなかったという。一方、ヨーロッパからアジアに至るインド洋を通る東廻りの海洋交易ルートは、スペインではなくポルトガルとオランダが支配していた。ただ、18世紀中盤に至るまでこれらヨーロッパ諸国は、アジア本土で安定的な港湾・商品集散地を確保するに十分な軍事力を展開することはできなかったため、基本的には協力的な現地政治勢力を自らの帝国経済版図の中にとりこむか、インドのゴア、マラッカなど島嶼地帯に防衛可能な港湾拠点を確保するに留まっていた<sup>5)</sup>。

「銀の時代」に環太平洋地域に形成され始めた広域圏連鎖構造を炙り出す別の手法としては、世界環境史の重鎮であるマクニール（John McNeill）やロバート・マークス（Robert Marks）の論考が有益である。「銀の時代」に始まった西欧人との遭遇・接触や西半球社会との交易が太平洋地域にもたらした生物・環境上のインパクトを、マクニールはMagellan Exchangeとよび、世界史上の意義としてはクロスビー（Alfred Crosby）がその古典『環境帝国主義』（*Environmental Imperialism*）において構築した大西洋世界をめぐるColumbian Exchangeの延長上に置く。西欧人の身体を媒介としてアフリカ、ヨーロッパ大陸からもたらされた流感や天然痘などの病原体は、南北アフリカ大陸の先住民にもたらした壊滅的被害と同様の打撃を、太平洋島嶼の現住民人口に与えた。商業農作物として白檀が中国に輸出され始めたことによって、ハワイでは白

檀をめぐる収奪的な農業慣行が生まれ、現地の植物生態系を攪乱した。その一方では、アメリカ大陸土着の植物が、ガリオン船貿易を経路として太平洋島嶼とアジア大陸にもたらされた。太平洋の西側に伝わったさつまいも、ピーナッツ、とうもろこし、タバコなどの植物は、18世紀の中国における人口増加に貢献したのである<sup>6)</sup>。

モノ（動植物）の広域移動回路は、この時期に太平洋の北辺でも形成されていた。アラスカからブリティッシュ・コロンビア、アメリカの太平洋沿岸にかけては、先住民によって捕獲されたオットセイ、ラッコなど海洋動物やビーバーの毛皮が主にロシア商人をの手にて中国市場に送られ、そのかなりの部分はゴビ砂漠を超えてロシア帝国の都市部市場にも到達していた。18世紀終盤には、イギリス商人がハワイを経て中国（広東）向けに毛皮輸出を行う交易回路を開いたため、北米大陸太平洋沿岸地域の動物資源は、太平洋の北辺と中央を横切る陸海両ルートを通じて大陸間交易網に組みこまれていった。自給自足、あるいは極めてローカルな交換体制のなかで行われていたかに見えた北米先住民の動物捕獲行為やヨーロッパ人との毛皮交易は、実は太平洋を越える遠隔連鎖構造の一部を構成していたのである。近代資本主義的生産体制に編入されていく過程で生物資源の再生・持続不能な規模での乱獲がおこなわれ、それが深刻な環境攪乱要因となったことは、ハワイの白檀のケースと同じであった<sup>7)</sup>。

動植物資源を媒介に形成された連鎖についてさらに述べるならば、18世紀転換期ころまでには牧畜がカリフォルニアにおける富の集積に寄与した過程を実証するデビッド・セントクレア (David J. St. Clair) の論考や、ジム・ハーディー (Jim Hardee) のカリフォルニアの毛皮・皮革貿易についての論文が注目される。主としてスペイン商人の仲介による皮革・牛脂交易は、南カリフォルニア、サンタ・フェ、セント・ルイスなど複数の結節点を通じて北米大陸の大西洋沿岸地域やメキシコ・中米地域とも繋がっていた。ニューイングランド（コネチカット、マサチューセッツ）の靴産業の勃興も、この広域連鎖構造を抜きにしては全般的に理解できないのである。このように、カリフォルニアの「ローカル」経済は、19世紀中盤に起こるゴールドラッシュ以前すでに、交錯する北米大陸の物流ネットワークに編みこまれながら、「環大西洋経済」の周縁部を形成していたのである<sup>8)</sup>。この太平洋世界と太平洋世界との「地続き性」をどう概念的に整理していくかは、パシフィック・ヒストリーの理論的枠組みを構築するうえで避けて通れない問題であると思われる。

「銀の時期」に出現したモノ・カネの移動とその集積によって、太平洋を東西に横切る連鎖に加えて、南北の遠隔地連鎖も徐々に形成され始めた。そしてそれは、西欧社会の視野に映る太平洋世界が南半球に外延的拡大したことを意味した。ジェームス・クックの3回にわたる太平洋航海をはじめとして、西欧人の探検・空間的移動とその結果生み出された地誌・博物学知識が、ハワイ、タヒチ、サモア、オーストラリア大陸やニュージーランドを西欧世界の視界に収めた。18世紀末に南太平洋のマッコウクジラが乱獲のため激減をしたため、その主要な猟場が北に移動し、1820年代には北太平洋で捕鯨船が急増した。その多くは米英戦争中イギリス海軍に大西洋の猟場から追われたアメリカ合衆国北東沿岸部を拠点する捕鯨船だった。小笠原諸島がアメリカ捕鯨船の操業領域に組み込まれたのはこの時期である<sup>9)</sup>。太平洋の島嶼に出現し始めた農園では砂糖、コブラ等の熱帯換金作物が生産され、主にアジア大陸の市場で消費された。ただ大西洋世界と異なり太平洋では、この時期に組織的商業農業に投じられた労働力は、主に現住民



や大陸アジアからの契約労働者であった。太平洋世界の域内労働力移動もまだ比較的小規模なものにすぎなかった。

### 「金の時代」

1848年にカリフォルニアで金鉱が発見され、その僅か3年後にはオーストラリアでもゴールド・ラッシュが始まった。太平洋世界の「金の時代」の到来である。この時代には、モノ、カネに加えて、ヒトの広域移動が環太平洋地域を縦横する連鎖をさらに多角化・重層化した。そしてその域際移動・交換の大規模化を可能にしたのが、鉄道・蒸気船など交通・運搬手段における技術革新や、新たに登場した通信テクノロジーであった。技術や情報の集積が、いち早く産業化を遂げた欧米諸国の植民地建設や広域経済支配圏確立のための軍事・外交戦略を駆動し、太平洋世界における資源と市場の獲得をめぐる歴史主体間のせめぎあいは19世紀後半に一層先鋭化していった<sup>10)</sup>。

「金の時代」のさらなる特徴としては、まさにこの世界史上の一大変容期に、アメリカ合衆国が両大洋をつなぐ大陸国家として国土拡張を完結し、自由・平等・民主主義などの普遍的価値を建国理念として標榜する多民族国家として世界史の表舞台に踊り出たことである。太平洋海域においても、19世紀末までには東サモアをアメリカ海軍の支配下におき、1898年にはハワイを併合、米西戦争の結果プエルトリコ、グアム、フィリピンを領有し、アメリカ合衆国は陸海両域において太平洋国家としての体裁を整えた<sup>11)</sup>。「銀の時代」初期には「スペインの池」だった太平洋が17～18世紀に「イギリスの池」となり、20世紀には「アメリカの池」に変容して行くことことを予兆するものだった。そして産業・技術・農業大国としてアメリカ合衆国は、大西洋対岸からのみならず、太平洋を越えたアジア地域からも大量の労働力を吸引し始めたのである<sup>12)</sup>。

ところで、環太平洋沿岸地域で相次ぎ生じたゴールドラッシュは、まったく新たな海洋横断的経済構造を生じさせたというより、19世紀前半までにすでに形成されていた大陸・地域間商業連鎖の構造を幾何級数的に拡張し再編したと理解するほうが妥当であると、モノとカネの流れに注目する経済史家たちは主張する。その論拠としてフリントとセント・クレアは、太平洋世界に「金の時代」が到来したことによって、太平洋を東から西に向かう銀の連鎖が途切れたわけではなく、またゴールドラッシュの「お膝元」であるカリフォルニア自体が、その後も長く銀経済圏に留まり続けたことを指摘する。19世紀後半にカリフォルニアで産出された金の約8割は北米大陸の北東都市部に送られていたが、それと同時に大量の銀がカリフォルニアから太平洋を横断して西に移動し続けたのである<sup>13)</sup>。

つまり、ゴールドラッシュ後も約半世紀にわたって、北米大陸産の銀の主要輸出先が中国を中心とするアジアの銀経済圏であったという基本的構造に変わりはなかったのである。1859年のネバダでの銀鉱脈の発見のあとは、アメリカ合衆国産の銀貨とメキシコ産のシルバー・ペソ（その多くは内陸交易ルートを経てサンフランシスコから出荷されていた）が、中国貨幣市場で激しい競争を展開した。1870年代から80年代にかけてアメリカでは、中国市場の「嗜好」に合わせたサイズの、中国を中心とする東アジアへの輸出用のみに特化し、アメリカ国内での5ドル以上の単位での流通は禁止されていた特殊銀貨「貿易ドル」が鑄造されていたほどである。広

域経済圏として考えるうえで、このカネを媒介とした太平洋世界の複中心構造は、次節で詳述する「ふたつの太平洋世界」概念の理論的可能性を考える上でも重要であると思われる。また、北米大陸で働く中国労働者の本国送金も、この太平洋を西に流れる銀の回路の一構成要素として再構築することも可能であろう<sup>14)</sup>。

太平洋沿岸各地域で起こったゴールドラッシュが「銀の時代」に既に形成されていた域際交易回路を拡充して言った過程は、モノの動きからもうかがわれる。20世紀前半の北米大陸太平洋沿岸部での農業発展は、周辺地域の都市化とそれに付随する食料需要の増加によって促進されていたことはつとに知られているが、ゴールドラッシュ後約半世紀にわたってカリフォルニアで続いた農業生産ブームの中心的品目は、小麦を始めとする穀物であった。19世紀末に小麦価格が破綻し野菜・果物生産への組織的転換が起こるまで、カリフォルニアは北米大陸北東部、イギリス、アラスカ、オーストラリア、メキシコと中南米大陸太平洋沿岸地域、中国等への小麦輸出を大きく伸ばしていた。特にオーストラリアのゴールドラッシュ初期やクイーンズランドへの食料供給は、カリフォルニアからの小麦その他の穀物輸入によって支えられていたのである<sup>15)</sup>。カリフォルニアにユーカリプタスの樹をもたらせた北米大陸太平洋沿岸地域とオーストラリアの植物品種移植をめぐるイアン・ティレル (Ian Tyrell) の国際環境史研究<sup>16)</sup>とあわせて読むと、19世紀後半の北米太平洋沿岸地域とオーストラリアの大陸間連鎖の形成を考えるうえで示唆に富む。

このように、「金の時代」に新たに生じた商業機会や交通・通信テクノロジー革命によって拡大・稠密化した太平洋の大陸間・島嶼間の関係性の広域連鎖のなかで、アジア人労働者の大陸間移動も活発化していく。そしてさらにそれは、大西洋世界で19世紀初頭から漸次広がった黒人奴隷制度の廃止という西欧資本主義体制の新段階とも表裏一体の関係をなしていた。奴隷制という究極の不自由労働に替わる新たな「効率的」労働力調達形態が、奴隷制廃止後も低廉労働力を引き続き必要とした北米大陸南部、カリブ海・中南米各地で模索された。太平洋世界においては、合衆国、カナダ、中南米の一部の国々に加えて、ポリネシア島嶼、英領白人移民社会（オーストラリアとニュージーランド）や東南アジアのヨーロッパ植民地が、アジア人低廉労働力の主要吸収源であった。この時期に年季契約奉公、渡航費を前借りし年季契約労働的な制約をおうものの年季明け後の自由は一応保障されていたクレジット・チケット制などさまざまな雇用形態をとって、キューバや中南米、英領のカリブ海島嶼、南アフリカに移住した中国人やインド人が、このような擬似「自由」労働力の広域移動の舞台における新たな主役となったのである。

この時期、太平洋世界の国際労働市場再編の波に最も影響を受けたのは、清朝末期の中国であった。この時期には国内移動に加えて、東南アジア、フィジーなどの南太平洋島嶼、ペルー、キューバ、オーストラリア、ニュージーランド、南アフリカへの中国人労働者の大規模移動が始まる。廃止された奴隷貿易の垂流制度的性格が強い「苦力貿易」としてしばしば総括されるこの時期の中国人労働者の国際移動は、アヘン戦争の結果イギリスの直轄植民地となった香港やポルトガル領マカオ、福建省のアモイが中国大陸側の主要な送出发点であった。ゴールドラッシュ後の北米大陸の金・銀鉱山や鉄道敷設地域、奴隷解放後の労働市場の混乱期にあったアメリカ深南部農園地帯への中国人契約労働者の移動も<sup>17)</sup>、太平洋全域に展開していた中国人の国際越境移動網の多角的構図のなかで相対化されなくてはならない。

それと同時に、中国人労働者への差別・排除の点でも、太平洋世界はひとつの完結性を持った連鎖の輪を形成し始める。対中国人差別措置は、入国者数割り当て、人頭税その他の特別課税、上陸禁止措置など、中国人の移動先各地域でさまざまな形態をとって採用され始めた。国家単位の中国人入国制限政策の登場は、オーストラリアとニュージーランドで1881年（オーストラリアは1901年移民制限法によって中国人移民を実質的に全面禁止）、カナダで1885年である。1882年のアメリカの排華移民法も、太平洋世界の白人多数派社会の中国人低廉労働者の大量流入への拒絶反応が作らせた南東太平洋を縦走する排華防波堤の連鎖の一環として理解されるべきであろう。「自由」労働が国際規範となりつつある時代に、「労働と生活の場としての太平洋世界」のどこに誰がその拠点を持つことを許容されるのか。そしてその決定過程に近代国民国家の国家権力はどのように自らを投影していくのか。近代国民国家成立過程で浮上するその問いに対して、中国人に関する限り1880年代には太平洋世界の白人多数派諸国の回答がすでに指摘されたわけである<sup>18)</sup>。

そしてその後、中国人に替わる低廉労働者としてハワイや北米大陸に移動し同様に排斥の壁に遭遇したのが、日本人とフィリピン人であった。その主な海外移動先であったアメリカ合衆国にとって、日本人とフィリピン人労働者の北米本土移住は、「帝国」へ変容したことの派生結果のひとつであったといえる。ハワイにはすでに主に砂糖プランテーションで働く多数の日本人や中国人が居住していたし<sup>19)</sup>、植民地として領有するに至ったフィリピンは、非白人現地住民に加え中国系人口も多く抱える多民族社会だった。いわゆる世紀末アメリカの「反帝国主義」陣営の一翼は有色人種排斥論者が担っていたのもそのためである<sup>20)</sup>。

このように見ると、1907～8年日米紳士協定の締結、1924年の排日移民法制定、1934年のタイディングス・マクダフィー法によるフィリピン人の「外国人」化とその翌年に制定されたフィリピン人を対象とする「祖国帰還援助法」なども、「労働と生活の場としての太平洋世界」で越境する日本人とフィリピン人という非白人集団にむけてアメリカ合衆国が示した、時系列的に一貫した態度表明であったと読み替えることも可能である<sup>21)</sup>。そしてさらに日本人移民に対してアメリカ合衆国など受け入れ側国家が示した対応そのものも、同時代に労働・生活空間を共有していた他の民族集団へのホスト社会の態度とも有機的に関連づけながらその本質を読み取ることを、いま我々には求められている<sup>22)</sup>。

世紀転換期から20世紀初頭にかけてアメリカ合衆国は、〈われわれ国民 (We the People)〉の外延線と、それを越えて〈われわれ国民〉に包摂されることのない〈他者〉との境界づけを行うという、近代国民国家がその誕生時から不断に求められる政策課題に直面していた。それは領土拡張のあとには、具体的には移民法や帰化法といった法制度上の問題となって表面化していく<sup>23)</sup>。従って、ほぼ同時期に自らの「帝国」的支配領域に入ったハワイとキューバの経済がともに砂糖プランテーション制度に依存するものであったことから、アメリカ合衆国は、人種、移民労働者、市民権など資本主義の拡大浸透と同時に進行していた国民国家の形成をめぐって類似した諸課題に直面せざるを得なかったのである。

この点については、ボルク (Katherine Bjork) が興味深い比較研究をしている。合併直後のハワイについては、セオドア・ローズベルトを始めとする連邦政府の有力政治家が、太平洋の中枢に位置するこの群島を人種的に「望ましい島」に変えていくために、南欧（ポルトガル、ス

ペイン領カナリア諸島)からの白人(市民)労働者の計画的入植を推奨しようとした。しかし地元の白人プランター勢力は、アメリカ本土併合後も、労務管理上より扱い易いと考えられていた非白人契約労働者の継続的導入・使用を望んだ。年季奉公人制度を禁じるアメリカ本土法制のハワイが適応されたあとは、「自由移民」の名のもとで将来の市民権賦与を想定していない非白人労働者(日本人とフィリピン人)の導入が続いた。一方キューバでも、アメリカ軍政開始直後は、キューバを「白人化」する政策目標のもと、将来彼らに市民権を付与する想定のものに、スペイン本土とカナリア諸島からの白人労働者導入が軍政当局によって奨励され、年季奉公人制度は一旦禁止された。しかし軍政終了・キューバの「独立」後は、現地利害関係者の意向のもと年季奉公制度が復活され、後年のメキシコ人を対象としたブラセロ方式を予想させる、将来の市民権賦与を前提としない非白人(中国人・フィリピン人)を対象とした、一種の期限付きゲスト・ワーカー制度が案出されていく。このような近代国民国家の政策工学の場において、大西洋世界のヒトの移動回路と太平洋のそれは、カリブ海を介して繋がっていたのである<sup>24)</sup>。そしてこのことは、近代資本主義が南米アメリカ大陸に浸透しながら西回りの経路で太平洋世界に進出する歴史過程を可能にしたのは、アジア人の労働であったという命題にわれわれの目を開かせるものでもある。

## 2. 「パシフィック・ヒストリー」の一領域としてのアジア人・日本人の国際移動研究

### 「ふたつの太平洋世界」論と日本

すでに論じてきたように、明治維新後本格的に始まった日本人の海外移住や、海外植民地帝国建設に付随する殖民、「勢力圏」への人口移動も、パシフィック・ヒストリーの「金の時代」に、太平洋世界が交易のみならず「労働と生活の場」としてさまざまな個人・社会集団・国家間のせめぎあう空間に変容していった歴史的文脈において読み解くことが出来る。また越境日本人の主な到着先であり、さまざまなレベルで大西洋世界と太平洋世界の「渡り廊下」的空間を構成していたアメリカ合衆国の「金の時代」における世界史的重要性を想起するとき、この両大洋世界の「地続き性」ををいかにパシフィック・ヒストリーに反映させていくかという問題に帰着する。そこで本節では、1995年にカナダのブリティッシュ・コロンビア大学で開催されたもうひとつの学際的国際会議、「太平洋の再構築」(Reimagining the Pacific)で提起された注目すべき分析枠組みを紹介したい<sup>25)</sup>。

前節で紹介した『太平洋の世紀』の3巻本は、主として経済史と環境史専門家の論文によって構成されていたが、「太平洋の再構築」会議は、文化研究、地誌学、政治学など多岐にわたる領域の専門家による共同研究であった。その成果として出版された『環太平洋には何があるのか』(1998)に編著者として計4本の論文を寄稿したのは、中国近代史研究家アリフ・ダーリックである。ダーリックは同書の導入章において、地域概念としての太平洋世界が「発明された概念」であるという立場を明らかにした上で、太平洋世界の地域範囲は、その内部でモノ・カネ・ヒトのおりなす営為の様態に呼応して拡大したり逆に収縮もする、流動性に富む歴史空間であるとした。またダーリックは、さまざまな人的移動・物流・文化接触が交錯し連鎖しあう太平洋世界の「実体」と、それが歴史上いかに「表象」されるかは別個のものとして考えられなくて



はならない点も併せて指摘していた。太平洋の「表象」のされ方は、歴史主体（そしてそれを研究する者）の利害関心や力関係を反映する選別のフィルターに濾過され、時代ごとに再定義・再解釈され続ける。それゆえ、太平洋とは何か、何が太平洋でおこったかを考える上で、「いつ、誰にとっての太平洋」という問いかけが常にワンセットとして意識されなければならない<sup>26)</sup>。

さらにダーリックは、「銀の時代」からすでに存在していた太平洋世界の複数中心構造を考える上でも有用と思われる、太平洋世界の地域形成をめぐる興味深い概念整理をおこなっている。欧米側の見た太平洋地域史は、欧米の視野から認識され思想的構築や文化営為によって「発明」されたものであり、ダーリックはこれを「欧米太平洋」(EuroAmerican-Pacific) とよんだ。近代資本主義の展開過程で、ヨーロッパ人や南北アメリカ大陸に移住したヨーロッパ人が、それまでローカルな構造のなかで接触・交渉していた太平洋地域の人々とその営為をより大きな国際構造に（主として植民地収奪的に）取り込みながら、太平洋世界をひとつの相互還流構造を持つ地域として組織・形成していったのである。

その「欧米太平洋」と並立する歴史主体として、ダーリックは「アジア太平洋」(Asia-Pacific) を設定する。膨張する西欧近代資本主義がインド洋世界と太平洋世界を浸透しながらアジアに到達する以前、アジアには中国を中心とする中華経済圏・朝貢貿易体制がすでに成立していたことは、濱下武志などアジア経済史研究者によってすでに明らかにされているが<sup>27)</sup>、ダーリックの「アジア太平洋」も、中国（広東）をその核として概念化されている。18世紀から19世紀にかけて欧米諸国のアジア進出が進展するについて、「アジア太平洋」各地で現地の政治・経済制度、文化様式が次第に排除・周縁化されていった。しかしそのなかにおいても中華経済圏は、長く「アジア太平洋」の経済的求心力の主体であり続けた。そして「アジア太平洋」は、19世紀後半には「欧米太平洋」の急速な産業発展や植民地開発に大量の労働移民を供給する形で「欧米太平洋」と接触・競合的融合を果たし、その過程で太平洋島嶼、南北大陸やカリブ海地域におけるアジア人の国家越境的民族社会（ディアスポラ）の歴史的基盤を生成したのである。ダーリックによる「ふたつの太平洋」概念は、二重中心構造のもとにモノ・カネの移動回路が拡大展開していった太平洋世界の歴史的軌跡を概念化する上でのもうひとつの視角を切り開くものであり、大西洋世界と太平洋世界に介在するアメリカ合衆国の、パシフィック・ヒストリーにおける位置づけを示す枠組みでもあると言えよう<sup>28)</sup>。

そしてここでやはり問題になってくるのが、日本の位相である。「欧米太平洋」と「アジア太平洋」のせめぎあい（相互浸透）が進む19世紀末に新たに生じた歴史展開として、ダーリックは近代日本の足跡に注目している。「銀の時代」を通じて中華朝貢貿易体制の末端を担っていたアジア国家でありながら日本は、開国・明治維新後、欧米型の資本主義的経済発展を志向しつつ急速な国家主導型の近代化を遂げ、20世紀に入ると欧米諸国に混じりアジア大陸の蚕食に参入しつつ「アジア太平洋」のもうひとつの中心部を新たに形成するに至る。しかしその近代化の性格と植民地主義的海外膨張が露呈したように、日本の行動様態は極めて「欧米太平洋」的性格の強いものであり、ここからも「脱亜」を志向した近代日本のアジアにおける複雑な位相がうかがい取れる。東栄一郎が提起する近代日本の帝国主義殖民主義史と非勢力圏への海外移住史の包括的理解<sup>29)</sup>をパシフィック・ヒストリーの一分野としてめざすとき、我々は、この「ふたつの太平洋世界」の接触・相克・相互浸透という枠組みからも大きな示唆を受けることが出来

るのではないだろうか。

### 中国人海外移民研究からの示唆

以上、パシフィック・ヒストリーの一局面としての日本人海外移動研究への接近法を、アメリカでのパシフィックヒストリー研究動向に照らし合わせながら探った。次に、国民国家の地理的・政治的境界を浸透・縦断する越境的民族コミュニティの形成と変容についての研究蓄積が近年著しいアメリカにおいて、そのなかでも特に注目すべき研究を数多く生み出している分野である中国人移住・移動研究を概観し、その研究潮流が日本人の国際移動・移住研究にむけて示唆する視座を考察したい。

社会人類学者ニーナ・グリック・シラー (Nina Glick Schiller) とその共同研究者たちによって1990年代半ばに提起された「トランスナショナリズム」の研究パラダイムは、海外移住者が日々の生活の中でホスト国の国家権力や社会環境と折り合いをつけながら自らの生を実践していくなかで、通信や送金を媒介として祖国の家族・親族・社会集団などとの紐帯を維持し、宗教、文化活動、政治参加など多様な社会場裡を通じて出自国との繋がりを維持・再構築していくさまを、「越境する社会場裡」(transnational social field) として前景化することに成功してきた<sup>30)</sup>。

このような一国史の枠組みを一旦解体してから再構築する「トランスナショナリズム」に駆動される太平洋世界の民族移住史としての嚆矢は、コロンビア大学の若き歴史家、アダム・マッキューエン (Adam McKeown) が1999年に *Journal of Asian Studies* に発表した論文であった。従来の中国人移民研究は、祖国・中国への帰属意識の維持か定着先の北米への同化適応かという二項対立図式に囚われがちであった。その呪縛からの脱却を目指すマッキューエンはこの先駆的論文において、近代国民国家の枠には収斂されきれない、越境して営まれる社会組織を媒介としたり、複数国に跨って形成・維持される集団帰属意識を介して構成される中国人たちの「越境する社会場裡」に軸足を置く海外移民研究の必要性を提唱した<sup>31)</sup>。マッキューエンはその2年後、博士論文を基に書かれた単著において、ペルー、シカゴ、ハワイの中国人移民コミュニティの域際比較研究という斬新な手法によって、必ずしもナショナルなるものに濾過されないローカルとグローバルを直接つなぐ中国人の海外移動・移住とその営為のありようを他方向的構造をもつ歴史・地理空間として活写した<sup>32)</sup>。

同じくトランスナショナリズム研究の系譜にある中国人北米移住研究としては、マデリン・シュー (Madeline Hsu) の排華期に広東省台山県からアメリカ合衆国に移住した中国人越境者たちの研究やエリカ・リー (Elika Lee) の排華期 (1882-1943) の中国人の北米移住とそれに対応するアメリカ合衆国の「国境警備国家」(Gatekeeping Nation) 化を精査した研究があげられる。前者においてシューは、台山を出自とする同郷人たちが、対中国人排斥体制を網をくぐり抜けてアメリカ合衆国に入学・定住する過程で依存した血族・親族関係の絆や台山人同士の互助・幫助ネットワークを「トランスナショナル・コミュニティ」として定義する。一国史の殻を破り太平洋を双方向的に縦断するシューの視点と語り口は、19世紀サンフランシスコの六公司を中心とする華僑社会の形成と変容を、広東との持続的紐帯を遠景として紡ぎあげる陳勇 (Yong Chen) の著作でも踏襲されている<sup>33)</sup>。

そして日本語で発表された研究として、19世紀中庸から再建期にかけてのアメリカ合衆国、

キューバ、ペルーの複数の華民社会と相互の関係性をトランスナショナル・コミュニティとして緻密な資料操作に基づき再構築する園田節子の近著が、中国人海外移住研究に新たな方向性を示したことが大いに注目される。海外中国社会のなかに送出国政府の「官権」がいかにも「浸透」「越境」してくるのかという、社会史として書かれた英語の華民トランスナショナリズム研究からはややもすると欠落しがちな国家形成に関する設問にまで分析の射程を広げている点で園田の研究は出色であり、英語圏への発信が大いに待たれる秀逸な実証研究である<sup>34)</sup>。

日本とアメリカ合衆国というふたつの「帝国」に包摂される越境的な社会空間に生きた北米在住日本人とその子供たちの歴史体験を照射した東栄一郎の研究がすでに検証したように、トランスナショナリズム研究の分析視角が、日本人の海外移動・移住研究においてもなしえる貢献は大きい。そしてその新たな研究地平においては、越境者たちが歴史主体として作りあげる国境を溶解する社会場裡に焦点をしばる社会・文化史のまなざしと、民衆による国民国家に替わる「線引き」の場に自らの秩序形成原理を持ち込もうとする出自国・居住国双方の「官権」のありように目を配る政治・外交史のまなざし双方の、学際的融合が求められるのである。そして、送出国——越境者たち——居住国を有機的に関連づけて考えていく上で、やはり汲みあげられるべき歴史主体として、貴堂嘉之が19世紀後半の中国人北米移民研究の文脈において「門戸開放推進派」と名づけ重視した、居住国側輩出の人々（そしてその多くは宣教師など自らが越境者であった）をも包摂する分析枠組みが必要とされているのではないだろうか<sup>35)</sup>。

## むすびにかえて

大西洋世界と同じく太平洋世界は、モノ・カネ・ヒト・情報・知識・文化・情念などが多角的に相互作用しながら移動し変容していく歴史展開の場である。太平洋世界の各所で地理的に近接する歴史主体間の比較的単純な交換と交渉から始まったものが、近世・近代を通して次第に複数主体間の広域連鎖の集積体となり、その相互関係は19世紀後半から急速に稠密化していく。その多角的かつ重層的回路の理解と表象を目指すパシフィック・ヒストリーは、さらなる研究業績の蓄積を必要としている。19世紀後半にイギリス、フランス、オランダ、スペイン・ドイツなどの西欧植民地帝国、アメリカ合衆国・ロシアなどの「欧米」大陸帝国などと広域ネットワークを共有する太平洋世界の結節点のひとつとして、中国や日本などのアジア国家はいかなる秩序形成を求めていたのか。そして国家形成を補佐する「国民の物語」の構成要素として、日本人を含む越境民たちはどのような語られ方を、歴史主体たちによる表象のレベルと、研究者による知の構築のレベルにおいてされてきたのか。そして小熊英二が明らかにしたように、「日本人の境界線」が法制的にひかれつつあった19世紀末に<sup>36)</sup>、越境日本人はいかなる意味づけを市場・国家・社会から与えられ、また自らをそのなかに位置づけていたのか。そしてそれは、太平洋世界の他の国民国家においても共時的に進行していた「国民の境界線引き」とどういう共振関係にあったのか。このような幾層にもわたる問いをわれわれが怯むことなく引き受けたとき、日本人の国際移動研究は大きくパシフィック・ヒストリーの精緻化にも資することができるに違いない。

ここで再び、ダーリックが『環太平洋に何があるか』において示した論点に立ち戻って本稿

のしめくりとしたい。ダーリックが近世以来の「欧米太平洋」の構造的優勢論を受け容れたのは、それは単に欧米資本主義が太平洋地域に与えたインパクトの重要性を語っただけではなく、「欧米太平洋」の歴史主体や「欧米太平洋」から輩出された研究者による「アジア太平洋」の表象のされ方、「アジア太平洋」の概念化のされかた、そしてそれらに基づいて構築された英語圏で作られた知的パラダイムや学術情報群のヘゲモニーにもその批判的視線を向けるものであった。まだ未成熟状態にあるパシフィック・ヒストリーにおいて、日本やその他のアジア言語圏で活動する研究者や太平洋諸島の研究者・知識人たちが、自らの視点や理論、問題意識に基づいて太平洋世界の「実体」を語り、自ら導き出した知的パラダイムに立脚する論究を英語圏世界にむけて積極的に発信していくことの意義は、今後さらに増していくといえるだろう。

## 注

- 1) Arif Dirlik, "Introduction: Pacific Contradictions," in *What Is in a Rim? Critical Perspectives on the Pacific Region Idea* 2d ed. (Lanham, MD: Rowman & Littlefield, 1998), 3–12.
- 2) Dennis O. Flynn, Arturo Giráldez and James Sobredo, eds., *Studies in Pacific History: Economics, Politics and Migration* (Aldershot, Eng., Ashgate, 2002), 1.
- 3) 同書に加えて、Sally M. Miller, A. J. H. Latham, and Dennis O. Flynn, eds., *Studies in the Economic History of the Pacific Rim* (London and New York: Routledge, 1998); Dennis O. Flynn, Lionel Frost and A. J. H. Latham, eds., *Pacific Centuries: Pacific and Pacific Rim History since the Sixteenth Century* (London and New York: Routledge, 1999).
- 4) Paul D'Arcy, "No Empty Ocean: Trade and Interaction Across the Pacific Ocean to the Middle of the Eighteenth Century," in *Studies in the Economic History in the Pacific Rim*, 21–44. この時期の国際銀貿易については、Dennis O. Flynn and Arturo Giráldez が最近の論文の中で研究動向を的確にまとめている。"Born with a 'Silver Spoon': The Origin of World Trade in 1571," *Journal of World History*, 6: 2 (1995): 201–221.
- 5) Dennis O. Flynn and Arturo Giráldez, "Spanish Profitability in the Pacific: The Philippines in the Sixteenth and Seventeenth Centuries," in *Pacific Centuries*, 23–37; R. Bin Wong, "Chinese Views of the Money Supply and Foreign Trade, 1400–1850," in *Studies in the Economic History*, 172–176.
- 6) John R. McNeill, "Islands in the Rim: Ecology and History in and around the Pacific, 1521–1996," 70–84; Robert B. Marks, "Maritime Trade and the Agro-Ecology of South China, 1685–1850," 85–109, in *Pacific Centuries*.
- 7) John McNeill, "From Magellan to MITI: Pacific Rim Economies and Pacific Island Ecologies since 1521," in *Studies in the Economic History*, 72–93.
- 8) David J. St. Clair, "San Francisco's Pacific Exports, 1850–1898," 40–60, and Jim Hardee, "Soft Gold: Animal Skins and the Early Economy of California," 23–39, in *Studies in Pacific History*.
- 9) Elmo Paul Hohman, *The American Whaleman: A Study of Life and Labor in the Whaling Industry* (New York: Longmans, Green & Co., 1927), 84–88; 木村和男『北太平洋の「発見」：毛皮交易とアメリカ太平洋岸の分割』（山川出版社、2007年）、190–192頁。
- 10) テクノロジーと植民地帝国建設については Dwayne R. Winseck and Robert M. Pike, *Communication and Empire* (Durham: Duke University Press, 2007) が示唆に富む。
- 11) David M. Pletcher, *The Diplomacy of Involvement* (Columbia: University of Missouri Press, 2001).
- 12) アメリカ合衆国の移民、「内地植民地」先住民、海外植民地現住民への人種観を統合的に理解する分析としては、Matthew Frye Jacobson, *Barbarian Virtues: The United States Encounters Foreign People at*



- Home and Abroad 1876–1917* (New York: Hill and Wang, 2000) を参照。
- 13) Flynn, “In Search of Periodization for Pacific History: An Introduction,” 7; St. Clair, “San Francisco’s Pacific Exports,” 41–42.
  - 14) David J. St. Clair, “American Trade Dollars in Nineteenth-Century China,” in *Pacific Centuries*, 152–170.
  - 15) James Gerber, “Gold Rushes and the Trans-Pacific Wheat Trade,” in *Pacific Centuries*, 125–149 ; Warwick Frost, “Powerhouse Economies of the Pacific: A Comparative Study of Gold and Wheat in Nineteenth-Century Victoria and California,” in *Studies in Pacific History*, 61–74.
  - 16) Ian Tyrrell, *True Gardens of the Gods: California-Australian Environmental Reform, 1860–1930* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1999).
  - 17) Moon-Ho Jung, *Coolies and Cane* (Baltimore: Johns Hopkins University Press, 2006) は、アンテベラム期から再建期にかけてルイジアナの砂糖農園に導入された中国人労働者に関する刺激的な最新研究である。米国南部地域経済とカリブ海経済の接点においてアジア人低廉労働者の果たした歴史的役割を前景化するという意味でも斬新な視点を提供している。
  - 18) 19世紀後半から20世紀にかけての、入国管理体制の制度化と中国人移民の関連については Adam McKeown の最新書 *Melancholy Order: Asian Migration and the Globalization of Borders* (New York: Columbia University Press, 2009) を参照。Anna Pegler-Gordon は最新書において、中国人移民排斥体制の制度化がアメリカ合衆国の国境管理・移民入国政策に与えた影響を写真による身分証明書の採用と強化過程を通じて解き明かした。Anna Pegler-Gordon, *In Sight of America: Photography and the Development of U. S. Immigration Policy* (Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 2009).
  - 19) 飯田耕二郎『ハワイ日系人の歴史地理』(ナカニシヤ出版, 2003年), 15–32頁。
  - 20) Paul Kramer, “Race, Empire, and Transnational History,” in Alfred McCoy and Francisco A. Scarano, eds., *Colonial Crucible: Empire In the Making of the Modern American State* (Madison: University of Wisconsin Press, 2009), 199–209.
  - 21) James Sobredo, “The 1934 Tydings-McDuffie Act and Filipino Exclusion: Social, Political and Economic Context Revisited,” in *Studies in Pacific History*, 155–169.
  - 22) 黄禍論の高まりのなかで、日本人越境者はその波に巻き込まれるとともに、中国人との差異化をはかろうとしたことなどからも、日本人の海外生活経験は他の民族集団との混住状態の文脈で構築されるべきである。杉原達「越境考：『越境の中の近現代日本』特集にあたって」『日本学報』(大阪大学日本学研究室) 22号(2003年)：2頁。
  - 23) 貴堂嘉之「帝国と国民国家のあいだ：アジア系移民の越境・人種・アメリカ」『日本学報』(大阪大学日本学研究室) 22号(2003年)：1–20頁。
  - 24) Katherine Bjork, “Race and the Right Kind of Island: Immigration Policy in Hawaii and Cuba under US Auspices, 1899–1912,” in *Studies in Pacific History*, 140–154.
  - 25) *What Is in a Rim?* 所収のダーリックの諸論文を参照。
  - 26) Dirlik, “Introduction: Pacific Contradictions,” 1–18.
  - 27) 濱下武志『朝貢システムと近代アジア』(岩波書店, 1997年)を参照。
  - 28) ダーリックの「ふたつの太平洋」論については、園田節子が簡潔かつ的確に総括している。園田節子「アジアからの太平洋地域構築にむけて」『東京大学アメリカン・スタディーズ』5号(2000年)：125–133頁。
  - 29) Eiichiro Azuma, “Pioneers of Overseas Japanese Development”: Japanese American History and the Making of Expansionist Orthodoxy in Imperial Japan,” *Journal of Asian Studies*, 67: 4 (November, 2008): 1187–1194.
  - 30) Nina Glick Schiller, et al., eds., *Towards a Transnational Perspective on Migration: Race, Class, Ethnicity, and Nationalism Reconsidered* (New York: Academy of Sciences, 1992).

- 31) Adam McKeown, "Conceptualizing Chinese Diasporas, 1842 to 1979," *Journal of Asian Studies*, 53: 2 (1999): 306–337.
- 32) Adam McKeown, *Chinese Migrant Networks and Cultural Change* (Chicago: University of Chicago Press, 2001).
- 33) Madeline Hsu, *Dreaming of Gold, Dreaming of Home* (Stanford: Stanford University Press, 2000); Yong Chen, *Chinese San Francisco, 1850–1943: A Trans-Pacific Community* (Stanford: Stanford University Press, 2000).
- 34) 園田節子『南北アメリカ華民と近代中国』（東京大学出版会，2009年）。
- 35) Hirobe Izumi, *Japanese Pride, American Prejudice* (Stanford: Stanford University Press, 2001); 貴堂嘉之「＜アメリカ人＞の境界の帝國的再編：世紀転換期の中国人移民政策の変容：1882–1906」『東京大学アメリカン・スタディーズ』5号（2000年）：100–101頁。
- 36) 小熊英二『単一民族神話の起源』（新曜社，1995年）